

ポスト冷戦研究会/2009年7月18日

関下稔『国際政治経済学の新機軸—スーパーキャピタリズムの世界』（2009年2月）合評会

コメント—資本主義の段階規定を中心に

専修大学 矢吹満男

はじめに

「新しい時代に入ったかに見える 21 世紀世界の全体像を鳥瞰、素描」(p.127)

レーニンの帝国主義論の「線での理論的深化と拡充、あるいは創造的な発展を図る」(p.111)

I 関下氏の資本主義段階規定

ウェストファリア体制：独立国家の横並び体制

植民地をもつ宗主国—植民地の垂直的な、列強のブロックシステムの時期を経て、

↓

<パクスブリタニカの時代>：最大の植民地帝国主義イギリスのヘゲモニーの下での資本主義世界の組織化の第1段階 植民地主義に基づく覇権体制 古典的帝国主義体制

<パクスアメリカナの時代>：第2次大戦後、体制間の対抗下でアメリカのヘゲモニーに基づく独立した発展途上国（＝植民地体制の崩壊）を組織、資本主義世界の組織化の第2段階 アメリカの主導下でのグローバル化の第1階梯、「覇権国」アメリカの主導権が強く発揮された時代

第1に東西間の対抗という相対的に自立的な関係を軸に、

第2に西側世界内部での同盟的な相互依存関係を形成し、「体制的従属」

第3に共通の支配・影響領域として覇を競い合う南北関係 (p.8)

植民地主義にかわる「覇権主義」に基づく組織化の原理、体制間対抗下での「独立の諸国家の体系」を基礎にした覇権体制(p.46~7)

体制間対抗下でのアメリカの「覇権」体制は、その確立から展開にあたっては、その圧倒的な経済力、軍事力にも拘わらず、政治的には自制して、先進国間の協調を基にしたアメリカのヘゲモニー、アメリカンデモクラシーの発揮、アメリカ的生活様式の謳歌 「植民地なき」帝国主義 経済的には対外援助、多国籍企業、多国籍銀行の三段階の布陣 世界をアメリカに似せて作り替えること、「世界のアメリカ化」(p.50-1)

<再編>

アメリカの経済力の後退、ドル危機、スタグフレーション、サミット、米、欧、日の三極体制

競争力強化のための的確な処方箋、結局は成功しなかった、アメリカの競争力の弱体化は構造的なもの、製造業の自力での復活を事実上断念、1980年代後半からはサービス経済への道を模索、知的所有権に代表される「ニューサービス」、GATS（サービス貿易に関する一般協定）、TRIPs（知的所有権の貿易関連の側面に関する協定）、スペシャル301条(p.53)

次第に経済力を増した先進国への負担の増加要請と依存＝寄生、そして自己の国益の露骨な押しつけへと変質、マルチテラリズムからバイテラリズムへのシフト、日米貿易摩擦(p.50)

1991年のソ連・東欧の崩壊に始まる社会主義体制の瓦解と市場経済化の歩み

↓

<第3段階>

アメリカを唯一の覇権国―「帝国」とでも呼ぶべきもの―に昇華させ、文字どおり一つの世に結ばれたという意味で、グローバル化が本来的に進み出した新段階＝第3段階、パクスアメリカの第2階梯 アメリカ単極世界の下でのグローバル化の第2階梯(p.8)

社会主義体制の崩壊は第1の軸をなくすと同時に、アメリカの卓越した地位を突出

第2に軸の内部にもアメリカと他の先進諸国の間に格差を生み、

旧社会主義体制下の多くの国を移行経済国として南側に押しやり、その結果、第3の軸も途上国+移行経済国となってその裾野を広げると同時に、その中の一部がNIESやBRICsやNEXT11となって次第に分離して、第1の軸に吸収

知的財産権を中心にした資本主義、モジュラー型生産システム、オープンアーキテクチャ型ビジネスモデル

巨大企業はグローバル化にうまく乗るため、世界的に標準化された財の大量生産とともに、現地化や客層に合わせた個性豊かな財の提供―多品種少量生産―とを組み合わせたマーケティング戦略(p.54)

ブランドと情報ネットワークを握ることによって、指令、頂点にアメリカとアメリカ企業が君臨(p.54)

<パクスアメリカの第2階梯を彩る5つのパラドクス>(p.55-7)

① モノ作りをしない知的サービス大国、アメリカの対外依存と寄生

フリーエージェント社会、労働組合の解体と外注による一時的な雇用契約蔓延

知的サービス（高度な科学・技術労働+その周辺の単純労働的なもの）

② 国際収支赤字国が最大の海外投資国

③ 国内における民主主義の「後退」と世界的な民主主義の「高揚」

④ 「知財大国」アメリカと「世界の工場」中国の併走

IT革命に先導され、インターネットを中軸に据えた情報化に成功したアメリカを一方の極に、他方では世界最大の豊富な労働力に依拠したモノ作りの拠点としての中国をもう一方の極とする、新たな両極体制が急速に浮上 「スーパーキャピタリズム」

その仲介を担うのは、巨大な多国籍知識サービス企業であり、彼らがインキュベーターとして、「世界の工場」で低コストで生産されたものを、ブランド力を使って高付加価値を持った商品に仕上げ、世界大の巨大消費都市（グローバルシティないしはメガシティ）を中心にして世界大で販売

資本主義側がサービス経済化し、社会主義市場経済側が製造業に特化

それぞれが自立的に存在できず、相互に依存し合い、そして場合によっては相互転化を試み合いながらも、全体としては重層的・立体的な格差構造を作り上げている

- ・その基底には「グローバル原蓄」を担う極端な低賃金によるもの作り：二重の搾取と収奪
- ・その上にそれを直接に雇用する現地の地場産業とその所有者
- ・さらにその上部にはそれらに委託し、ブランド等の知財の独占による巨額の利益を

- そこから得ている強大な多国籍知識集積体とその支配者(p.79) 「グッドウィル」
- 全体の最上階には全体を統括する、目には見えない、秘密理に形成された人的関係で結ばれた金融と情報のネットワーク 「アクセスキャピタリズム」
- ごく少数の世界的な寡頭制支配の司令部：「ニューモノポリー」 (p.80)
- アメリカ「帝国」：今日の世界が「独立の諸国家の体系」、独立の諸国家お形式的には対等な関係という外皮を纏って、実質的には対米従属が多かれ少なかれ進行し、中には「体制的従属国」と呼ばれるような、特別にこのアメリカ中心の体制を支える国までもが現れている。そしてアメリカ「帝国」はこの支えなしにはその地位を維持し続けることができない(p.8)、アメリカという具体的な実態を持った概念 (p.82) 「目に見える帝国」 (p.82)

「グローバルな権力」への昇華こそが今日の「資本の権力」の野望、そしてまたそれを容認し、彼らに活動の自由を用意できることがアメリカ「帝国」のパワー(p.87)

⑤ アメリカの対外「依存」の増大と外国の対米「従属」の深まり

<アメリカ「帝国」の躓き>(p.59-60)

①アメリカの世界戦略と現地でのローカルな実施との整合性

②ドル離れ

「新興国」－BRICs＋NEXT11－を巻き込んだ新たな「アメリカ」の枠組み－その第3段階－を構築することができるだろうか。それとも「アメリカ」の崩壊だろうか。

③アメリカ国内での富裕層と貧困層と二極分解

④核管理体制のひび割れや先進国の協調体制の揺らぎ

<未来社会への移行>

ネグリとハートが未来社会を作っていく主体、現代社会の墓掘人と規定する「マルチチェーンを明確に定義できない、次代を作り出す主体とはいえない」(p.145)

<未来社会>

コラボレーションはグローバルな規模での共働制作＝製作が発展することを求めている。それは分業と協業と参加の到達点であり、誰のものでもない、「参加者全員」のものである時代、そこでは応分の役割分担と参加に応じた報酬が約束される時代、巨大分業体制だけが唯一の競争勝利の組織ではない時代の到来である。企業組織もヒエラルキー型からフラット化されたネットワーク型で、オープンで、ボランタリーで、分権的なものが模索される時代、経営者もその本来の管理労働に縮小化されて、プロデューサー的な立場になるような時代、そして知識創造活動が大事にされる時代、人間の能力の全面的開花と万民のための知識、つまりはパブリックドメインとしての活用が保障される時代、この時代にあっては共創と共働と共生がその標語となる時代

グローバルコモンズの下で、人間の平等、尊厳、自由に加えて、連帯精神と人類愛が花開く時代、平和が謳歌されるアソシエーション型の未来社会

知識や文化がビジネス対象になる「経済の文化化」と「文化の経済化」の相互作用は新たな時代、利潤で測れない価値を持つ意味が発揚される時代の到来、資本の支配は終焉 (p.27-8)

II 論点

1, ポスト冷戦期をどう位置づけるか？

「グローバル化が本来的に進み出した新段階」＝「第3段階」、「パクスアメリカの第2階梯」

「アメリカ単極世界の下でのグローバル化の第2階梯」

「植民地なき」帝国主義→唯一の覇権国アメリカを中軸とした「帝国」の時代

「スーパーキャピタリズム」「アクセスキャピタリズム」

「相互転化の時代」(p.157)

「帝国主義体制の一翼としてのアメリカ「帝国主義」の延長でみていくよりは、それを単独のアメリカ「帝国」とその支配下への先進資本主義と途上国の包摂化」(p.120-1)

「アメリカ「帝国主義」という主体、あるいは国家間関係で表すよりも、アメリカ「帝国」とそのネットワークという、人的関係—その中枢に資本の支配があるが—で表現した方が適切」(p.124) 「見えない帝国」

「古典的な帝国主義概念の延長として、つまりは帝国主義と植民地との縦割りのものの延長としてこれを理解するよりは、唯一の「覇権国」アメリカの下で縦横に結びつけられた、グローバルな寡頭制支配のネットワークの網の目、つまりは姿なき「帝国」とその下に張り巡らされた公式・非公式の「どす黒い」ジュー帯」(p.127)

2, 「スーパーキャピタリズム」の孕む矛盾をどう捉えるか？

3, ネオコンの登場？

新自由主義（ネoliberal）の後にネオコンサーバティブがくる

秩序を乱すものには容赦ない制裁を加える

アメリカはポスト冷戦期に超極端を揺れ動いた(p.54)

4, 「グローバル原蓄」

5, 未来社会をつくっていく主体？

「マルチチュードを明確に定義できない、次代を作り出す主体とはいえない」

* 「アメリカの唱えるユニラテラリズムと力の政策によるアメリカ流の自由や民主主義ではなく、それを裏返しにした、鏡の反対像をわれわれは造り出すことであり、そのミラーイメージを基に作り替えに向けて、日夜、アメリカ政府と対話し、つばぜり合いをして、確実な譲歩を勝ち取っていく努力を重ねる」、「民主主義の新たな到達点」(p.28)

* 「現代社会を支え、またその資本支配の圧力に苦しめられているグローバルな勤労者層が、国籍を超え、立場を超え、思想信条を超えて、連帯して労働者・勤労者としての権利要求と待遇改善要求に基づく前進を一步一步図ることこそが本道、それを組織できる原理の確立と指導層の確立が待望」、「グローバルな階級対抗」(p.87)

「グローバル原蓄は資本と労働との対抗をグローバルな場に押し出す」(p.88)

「アメリカ「帝国」を頂点とする国際的なピラミッド型のヒエラルキー組織が…グローバル資本主義を支配し、その管理労働を中間幹部に担当させる、それが資本の支配下に包摂されるか、それとも管理労働の本来の職務を全うするようになるか、その帰趨は力関係にかかっている」

知識資本とその新たな「知識階級」(p.88)

(IT 技術者、経営管理者、クリエイター、コーディネーター、ファンドマネージャー、エージェント、コンサルタント、プロデューサー)

<参考>

*二瓶敏氏（「現代帝国主義論」）

第2次大戦後～現在 「現代帝国主義」

現代帝国主義の構築——冷戦帝国主義の第1期（1945—60年代）

現代帝国主義の再編——冷戦帝国主義の第2期（1970—80年代）

現代帝国主義の解体期——ポスト冷戦期

V 現代帝国主義解体

ポスト冷戦期、現代帝国主義の頂点に立つアメリカ支配の3つの支柱（理念、軍事力、経済力）は何れも凋落し、現代帝国主義は解体、アメリカは、現代帝国主義における「上部構造」としての位置から転落

しかし、転落したとはいえ、アメリカ帝国主義はなお死にきつてはおらず、…帝国主義的政策を継続しようとしており、現代帝国主義の頂点（「上部構造」）に返り咲くチャンスを狙っている

*河村哲二氏（「戦後パックス・アメリカナの転換と『グローバル資本主義』」）

パックス・ブリタニカの資本主義体制として現れた19世紀の資本主義

古典的帝国主義の時代：その変質過程で現れた19世紀末～第1次大戦

第1次大戦によるその衰退と解体のもとでの戦間期

第2次大戦を経てアメリカを軸に再編・確立されたパックス・アメリカナの資本主義世界体制

「グローバル資本主義」 重要な特徴の一つ：市場経済および「市場主義」の世界的拡大

戦後パックス・アメリカナという一つのシステムが変容しつつあり、そうした「過渡期」が示す現象

*馬場宏二氏（「宇野理論究極の効用」）

<大段階—宇野段階論>

重商主義

自由主義

帝国主義

<小段階論>段階論を現在まで延長、その対象は広義の帝国主義時代全体

古典的帝国主義

大衆資本主義段階：ロシア革命からソ連崩壊までの資本主義

グローバル資本主義段階：明確にこの段階に至ったのは1991年のソ連崩壊後、その20年ほど助走期間があった

*柴垣和夫氏（「グローバル資本主義の本質とその歴史的位相」）

第1次大戦後 現代資本主義は大きな変容

両大戦間期：過渡期

第2次大戦後：福祉国家資本主義

1970年代：過渡期

それ以後：グローバル資本主義

グローバル資本主義の歴史的位相は、「社会主義に対抗する資本主義」としての現代資本主義の、社会主義への接近を意味した福祉国家からの逆転による、最初の「反動期」